

## 黄表紙作者小考：恋川春町・芝全交・万象亭に関する覚え書き

園田，豊  
北九州大学文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/11911>

---

出版情報：語文研究. 71, pp.50-57, 1991-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 黄表紙作者小考

——恋川春町・芝全交・万象亭に関する覚え書き——

園田豊

## 恋川春町

### 恋川春町の顔

「金々先生菜花の夢を見ひらきしよりこのかた絵双帯ハ大人に處し通とむだと隆に行ハれて實録世に用ひられずもろ童蒙を教諭すもろべき其一端をたつか弓」(天明四年刊、朋誠堂喜三二作「太平記万八講釈」序)と評されたごとく、安永四年刊「金々先生菜花夢」で草双紙界に新風を吹き込んだ恋川春町。その春町の自画像は、自画作〔古今其返報怪談〕(安永五年刊)二丁表、二丁表〔金々先生不物好持たが病〕安永九年刊か)十五丁裏、〔夫ハ本歌是ハ狂歌万載集著微來歴〕(天明四年刊)七丁裏、八丁裏などに登場している(図一)。今、これらにより、その容貌を伺えば、やや太めのさがり眉に特徴のある、少し気の弱そうな細面の美男子である。春町が美男であったことは、「万象亭戯作濫觴」(天明四年刊)九丁裏・十丁表の見開きに、江戸作者の仲間入りをした万象亭が、喜三二・春町・朱楽菅江・四方赤良等の戯作者達を後見として「石橋」を踊る画が描かれており、その書

き入れに「なる程はる町ハうつくしいぞ大文字やてあきれたはづだ」とあることから知られる(但し、ここに描かれた春町の顔は似顔絵ではない。この人物は、獅子鼻の万象亭を除き、どれも同じような顔に描かれている。画工の北尾政美に、一人一人の顔を描き分けようとする意識がなかったためだと思われる)。「吾妻曲狂歌文庫」(天明六年刊)所載の酒上不埒像について、水野稔氏は「似顔絵だと思われるが、(中略)華奢風流の士の趣があり」と評された。「其返報怪談」「万歳集著微來歴」では、わざと野暮に鬢の毛をそそげさせている(「不物好」では坊主頭)が、確かにそれを感じさせる風貌である。そして、その容貌は、春町の性格の一端を物語っている。いまいだらうか。「万歳集著微來歴」は、「平家物語」の世界に「万歳狂歌集」の成立にまつわる事情を趣向としてないませた黄表紙である。中村幸彦氏は、春町が「自らをも含む『万歳狂歌集』刊行をめぐる狂歌壇の動搖を材としたもの」とされる。「判取帳」には、文屋安雄のものとと思われる。

住し春橋洲大人のたちにて寄花出替といふひな歌よめとせちに仰りければかくなんよみ侍り置きけるを萬歳集にいり侍らざり

けるを深くうらみて大人のみたちへもたえてまいらざりけるをけふのちの宝合ものし給ふよしをき、侍りまいりける時後の撰集もし侍りければ何にても白讀の歌かひつけおけと仰ありければふるめかしけれ共やはり／寄花出替（下略）

という詞書が収められている。彼の恨みがどこまで本気だったかはわからぬが、こうした輩は他にもいて、「万歳集著微來歴」巻頭で藤原俊成に「千載和歌集」入集を断られた平忠度が、四方赤良の所へ「一首なりとも御加入下さるる様に」頼みに来るくだりは、そのうがちであらうと考えられる。

また、七丁裏から九丁表にかけて、赤良の言いつけで酒上埒内（春町）が二位の尼の身代わりに、安徳天皇に見立てた枕を抱いて壇ノ浦に入水し、那智の沖に浮かび上がって、元木綱に「くわしく『万歳集』のことを話し、都へ伴い奉る」場面が出てくるが、これは「万歳集」刊行をめぐり、何かトラブルの生じた際に赤良に頼まれて、春町が木網の所へ仲裁を求めに出掛けたことを楽屋落ち的に記したものはなからうか。「狂歌師細見」（天明三年七月刊か）に中なほり、牛込と四ツ谷のわけ合も菅江さんほちろん木網さんの取持でさつはりすみやしたこれからみんな會へも一所に出てあそぶのす

ぜんでへおこりハまちがいのすじサとあるのが、その辺の事情を暗示する。「万歳集著微來歴」原文には、

二位のあまハ安とく天王をいだきたてまつりすでに入水のとこを見いだしとゞめけれどもこの身がハリはつとめてなくだれかれといふうちにくぼひとこへ水たまるるとむざんや四ものあからが

ぞうりとり酒の上のらち内がやくにあたりける

だんなのいひつけなればしぶ／＼（中略）

よんどころなく入水する（七丁裏・八丁表）

ぜんたいだんながつとめてくれればよひばだにむごひめにあひました（八丁裏）

とあり、春町は多少迷惑したような口吻を示す。それを一件落着後、あときはひどい目に会ったと黄表紙で笑い話にしている訳だが、ここには、人の依頼を無下に断れない春町の優柔な性質の一面が垣間みえているようである。

中村氏はまた、その黄表紙から春町を真面目で論理的に物を解き論ずる風あり、社会の動きが気になる社会批評的な作者であるとらえられた。式亭三馬「裨史億説年代記」（享和二年刊）に「恋川春町一流の画を書出して是より当世にうつる」と記されたごとく「金々先生栄花夢」の新しさの一に画があるが、他の勝川派や北尾派に比べてもより繊細で美しい描線が春町の身上であった。「化物大江山」（安永五年刊）や「其返報怪談」、「腹京師食物合戦」（安永八年刊）の登場人物の何ともいえない愛らしさも、真面目で写実的な画風が醸し出すところである。これらは即ち几帳面で敏感、神経質な彼の性格に起因するのではなからうか。こうしたことが春町の自画像から偲ばれるのである。その春町の顔を、「家の化物に、喜三二が肖像有、重政が筆、真に逼といふべし」（『増補青本年表』）とされた「龜山人家妖」（天明七年刊）の喜三二の顔と比較すれば（図2）、そのみでも両者の性格の相違は明らかに思われる。撫で肩の春町に対して喜三二は恰幅がよく、いかにも、その顔には、温厚だが、意志が強そうで、精神安定型の人がもつ鷹揚さが



図1（「万歳集著微来歴」の春町像）



図2（「亀山人家妖」の喜三二像）

認められる。この性格の違いが、よく知られる寛政の改革を題材とした「文武二道万石通」(喜三)、「鸚鵡返文武二道」(春町)に関する松平定信の招喚にあたって二人の明暗を分ける一要因となった。喜三は一説に「国勝手に申付」(よしの冊子)巻八)けられるような処遇を受けながらも、見方によれば政道批判と受け取られ、自らの蹉跌となりかねない性質を世相の中で帯びざるを得なくなり始めた黄表紙の筆を擱き、秋田佐竹候の御留守居役としての正道に立ち戻って天寿を全うした。一方、春町は「鸚鵡返」が主君松平信義作との噂が立ったこと(よしの冊子)巻七)も災いし、進退に窮して精神の均衡を失い、苦悶のうちに病死したと考えられる。

### 注

- 1 「黄表紙川柳狂歌」(日本古典文学全集46)口絵解説。
- 2 「中村幸彦著述集」第四卷五一―八頁。
- 3 「狂文狂歌集」(日本名著全集)第十九卷) 解題。
- 4 中村幸彦「戯作者の所懐」恋川春町の場合」(「文学研究」第六十号 昭和五十九年)「著述集」第四卷五一―八頁。
- 5 中村氏前掲論文参照。

### 芝全交

#### 芝全交の戲号

馬琴の「近世物之本江戸作者部類 ○赤本作者部」に  
芝に住す能楽の狂言師也和漢共に学問はなけれども滑稽の上手に  
てあたり作妙からす安永中より寛政に至るまで春毎に新作あり

と記述された芝全交は、「お菓子食ってこたへられぬが草冊子の大意なり」(寛政六年刊「百人一首戯講釈」序)と自ら唱え、「舂双帯のひじりに連なる」(天明三年刊「狂文宝合記」)「万象亭全交おかしミをおもにとる」(享和二年「神史億説年代記」)と称された黄表紙の名人であり、寛政五年四十四歳で没した時には、山東京伝も

芝全交へ曾て神史小説を好ミけるが去年の秋黄表紙の黄なる泉におもむきて(中略)長物語の長きかなしミを残す雖、然生涯著述多きが中大悲の千六本大佛縁起の妙作あれバ自讃佛乘にもあるべきなど手向の線香に泪のにごりをうちてせんかうくとひと總て是をおしむ予も亦全交をうしなひ草双紙の音を知る者なく是を愁ふるのあまり彼の遺稿の後に一首の夷歌をしるし侍る(下略)とその死を悼んだ。馬琴も滑稽の才を認め、「曲亭増補萬八伝」(寛政八年刊)の序文は「倣芝全交口調」にしたためている。全交の墓については、伊藤武雄氏がつとに報告され(芝全交ノ墓に就て)「歴史地理」第三十三卷三号 大正十一年)、麻布桜田町(現在西麻布3―2―13)妙善寺に今も残っている。墓銘は全交の息善次郎に乞われて、不二菴萬休居士が撰んだ。銘文には

芝全交武江芝人姓山本名藤十郎父吉川氏商家之子也為人謙遜下人  
隨大藏某肆俳優事後為水藩山本藤七之嗣續其業性多能穎敏喜戲作  
□本弄諱世人於此警發四方兒童聞名慕風晚參禪因洞山三頓棒而省  
悟癸丑春羅干病床遂卒居士以寬延五庚午年六月十九日生以寛政五  
癸年五月二十七日終歲四十有四葬妙善寺勇善次郎將之余言而勒石  
銘日(下略)

とあり、全交の人となりや水戸藩の大藏流狂言師山本藤七の養子となり、山本藤十郎と名乗ったことが知れる。それ以前には吉川姓を

用いたのであるが、その時の通称が「善一」であったと思われる。作家井上ひさし氏は「戯作者銘々伝」（昭和五十四年九月 中央公論社刊）「芝全交」において彼の本名を吉川善次郎と設定された。善次郎は息子の名であり、全交の通称が善次郎であったとは確定できないが、「善」の字がついていたことはこのことから推察できよう。父親の名から一字をとって子供に命名することはよくあることである。即ち芝全交の芝は住所、全交は善公の通韻であった。更に、「菊寿草」（安永十年刊）に全交作「煙競蕎麦屋真木」「大違宝船」を評判して「そばの手打に思ひつき地の全交さんの作」「是はつき地にあらぬ芝の先生の作」とあるのも注目される。ここで引合に出された「つきのせんこう」は、歌舞伎俳優初代坂東善次の俳名である。この人物に関して詳しくは棚橋正博氏の論文及び拙稿を参照戴きたいが、当時築地に住み、多く半道敵を勤め、そのおかしみのある演技が人気を博した江戸の名物であった。安永七年刊「當世杜撰商」に跋を寄せ、芝全交の黄表紙「直讀見臺萩」（寛政三年刊）に「そバにつきぢのせんこうをみるやふな人」とあり、「芝全交が社中万象亭」（「神史億説年代記」の洒落本「二日酔厄禪」（天明四年刊）にも登場するところから推して二人を含めた戯作文壇との親交が伺える。全交の草双紙昇登場は安永九年、そしてこの時点で築地善好のネームバリューは確立していた。とすれば、芝全交の戯号には築地善好に対するもじりの意味もあっただろう。「芝全交智之程」（天明七年刊）では、自らを司馬温公になぞらえ、「全交法師常々舛」（寛政六年刊）の題名は、兼好法師徒然草をもじっているが、「芝全交夢寓書」（三馬作、寛政九年刊）には、「しなの、せんかうよりつきぢのせんかうよりしよじしばのことだ」の書き入れがあり、ここでも二

人を併記している。おかしみの横溢した全交の黄表紙は、善次の芸風と脈を通ずる。また、ともに俳優でもある。「芝の善公」の戯号は、「築地の善公」に向かつての一種の会釈であった。

なお、全交の墓銘を撰した不二菴萬休居士について、伊藤武雄氏は「往年之を明らかにするを得なかつたが、これは最近判明した。」と記された（「芝全交といふ人」『傳記』第八巻六号 昭和十六年）のみで、その成果を活字にはなさらなかつたようである。「人名江戸方角分」には駒込富士前圓通寺の住職をしていた不二菴僧翁なる人物の記載があり、或いはこの人かと寺を訪ねてみたが、資料は戦災に失われており、判然としなかつた。ご住職によれば、文政十年七月十日に没した七世性道和尚がこの人にあたるかということであったが、墓碑には、その名と没年月日が刻まれているのみである。

#### 注

1 棚橋正博「森島中良と初代坂東善次―築地善交と中良・京伝の確執をめぐって―」（『近世研究と評論』第三十三号）、および拙稿「築地善好考」（『近世文藝』52）。

#### 万象亭（森島中良）

#### (一)、中良の没年

中良の没年について、「洋方醫傳」（明治十七年）には「文化五年十二月四日歿、年五十有五」とあり、この説は「名人忌辰録」（明治二十七年）「新撰洋学年表」（昭和二年）「日本小説作家人名辭書」（昭和四年。山崎麓「日本小説書目年表」附載）、「大日本人名辭書」（昭

和十二年改訂版)などに継承されていたが、これを駁されたのが高濱二郎氏「森島中良に関する謬説」(傳記)第九卷・第三・四號昭和十七年四月)である。

氏は、上行寺過去帳の「文化七年十二月四日 量山日壽 桂川甫山」および当時六甲南麓に居住しておられた桂川家所蔵の靈碑の「量山日壽覺位 文化七年庚午十二月四日」の記載にもとづき、中良の没年を文化七年十二月四日とされた。上行寺(現在、神奈川県伊勢原市上粕屋八七五番地に移転)の御住職によれば過去帳は戦火で焼失した由だが、近時、岡田袈裟男氏は、横浜在住の桂川憲長氏所蔵の「文化七年庚午十二月四日/量山日壽位」と記された位牌の存在を報告されている(森島中良晩年探索―あるいは一文人の言語宇宙―「日本文学」一九八三年一月号)。また、中良が文化七年まで存命であったことは、「惜字帖」に文化巳歳(六年)の記事があること(今泉源吉<sup>傳學</sup>の家桂川の人々「統篇」昭和四三年六月 篠崎書林)、「俗語解」に文化七年四月二十六日の日付が記されていることから明らかである。さらに、棚橋正博氏は、式亭三馬「田舎芝居忠臣蔵」自序(文化八年十二月)に「(万象先生は)文化七年庚午十二月四日に物故す吁可惜」とあることを指摘された。これらによつて中良の没年は文化七年十二月四日としてよい。但し、高濱氏以下の御指摘は、いずれも享年についての言及がない。五十五歳で差し支えないということであろうか。いまだ中良の享年を明らかにする近世期の資料を知らずにいる。「増補青本表」は、宝暦四年生、天明二年三十一歳と記すが、宝暦四年生まれであれば、天明二年には二十九歳となり、信をおき難い。近年のものでは、「洋学史事典」(日蘭学会編 昭和五十九年九月)が文化七年五十七歳没と記す

が、その根拠は記されていない。それに、これでは、文化六年五十六歳で没した(墓碑)兄の甫周と中良が同年齢になつてしまう。よつて、これはとらない。

以上、中良の没年を文化七年、享年五十五歳とすると、逆算して宝暦六年生となる。諸賢の御批正を乞う。

### 注

1 但し、「桂川家譜」には享年五十九歳とあり、これだと差し支えない。今泉氏は、墓碑の五十六歳をとつておられる。

### (二)、黄表紙「即銅さうハ虎の巻」の刊行

この作は、従来、小説年表類により天明元年の刊行とされていた。筆者もかつて、これに従い、本書を天明元年、本書の改題再摺本「嘘無誠」巻」を天明四年刊とした(「万象亭の戯作」「語文研究」第五十二・五十三号)。すると、中良の黄表紙作者としての活動は天明元年より始まることとなる。しかし、これは誤りである。石上敏氏は、本書二丁裏・三丁表「能沙灰塵之障」に「これはあさまでもやけるさうだすなのふるはたゞ事ではあるまい」という書き入れがあり、これは天明三年六月の浅間山噴火を当て込んでいること、従つて本書の刊行は、この年を逆上らないことを報告された(日本近世文学会昭和六十一年度春季大会 於早稲田大学)。棚橋正博氏は、本書十丁表の「まさのぶ画」の落款が天明四年以前に使用された形跡のないこと、「戯作者小伝」万象亭の条に「天明四年より神史の作あり」と記されていること、奥書末の「天放元年十二月三十一日」の「天放元年」は天明元年のもじりではなく、「てんぼの皮」などのそれで

あること等を指摘（「黄表紙總覽前編」五三九、四〇頁）、天明四年の刊とされる。ちなみに、「十二月三十一日」は、「おおみそか」、大いに味噌を上げるの意であろう。よって、この作は、「万象亭戯作濫觴」「従夫以来記」と同年の刊。中良の黄表紙の初作の一となる。

本書の内容は、滑稽見立て陣尽くしといったもの。奥書には「右の条々獨活木太右衛門真面が笠城の皇居において述る所のさうハ虎の巻の極意なり／御臺所天皇御かんのあまり即青銅三百文のかつげものを賜ひけるより此書を即銅三百の巻とも号けて家のたからとひめおきしをわればかり見るものかはとこれを皆様みなと川にて本屋何某にさづくといふ」とあり、天明三年四月二十五日、柳橋の河内屋で、中良が主催した宝合の会の雰囲気を有す。或いは、その折りに着想したのかも知れない。山東京伝の黄表紙「小人國毀櫻」が、本書「木鉄之陣」の趣向を借用していることは、かつて拙稿で指摘した（「万象亭」と京伝の絶交について）／＼「江戸時代文学誌」第四號昭和六十一年刊）。更に、棚橋氏は、式亭三馬の「俠太平記向鉢巻」（寛政十一年刊）も本書の趣向によるものだとされる（「黄表紙總覽中編七十六頁）。確かに、そこに見られる「戯場の陣」「閑道の謀」「影繪の謀」「蠅取綱の謀」などの見出しのついた滑稽な軍術は、本書と軌を一にする。首肯すべき御見解と思う。

### (三)、ヒツジは何を食ふか

今歳、平成三年は未年であり、これは天明七年と同じである。万象亭のこの年作の黄表紙に「面向不背御年玉」があって、自序末に「近頃高値ナモノヲ喰フ未之歳」と記される。この「近頃高値ナモノ」とは、何を指すのであろうか。中山右尚氏は、「当時の諸物価高

騰の暗喩か。」とされた（「江戸の戯作絵本（二）」二二二頁、注十三）。確かに、「武江年表」を繙いただけでも天明年間には、天災、飢饉、火事が打ち続き、米価を始め、諸物価高騰の記事には事欠かない。中でも、天明六年七月、関八州近在近国を襲った洪水は、奥羽廻船の航路を断ち、「物価弥貴」く「人々困苦甚だし」かった。延広真治氏は安永、天明期の戯作興隆の背景に、こうした不穏な世相に対する戯作者のカタルシスを見出し出しておられる。特に黄表紙は、こうした世相に敏感に反応する。例えば、万象亭「従夫以来記」（天明四年刊）六丁裏・七丁表の「諸色高直ニ差上申候」の看板を掲げた呉服屋は、天明三年の麻綿騰貴による呉服の高値を映したものであろうし、春町の「悦鼠肩蝦夷押領」（天明七年刊）二丁表にも「いかさま諸色高直の時節（中略）屈強の奴らに食いたてられては居候にはいかねるはずなり」とある等枚挙に暇ない。中山氏の注に特に異論はないが、ただ、ここは羊の喰うものとして紙価の値上がりをいったのではなからうか。万象亭が築地善交の戯名で著した「中華手本唐人蔵」（寛政八年刊）に、手紙を食べる羊の画が出てくる（図3）。また、寛政十一己未年刊「作者根元江戸錦」（櫻川慈悲成作・豊国画）一丁表には羊の画が大書され、ここにも「拾まいの金の小ばん紙ついやしてひつじの春の千金にせん 永壽堂（西村与八）」と羊と紙とを結び付けた発想が伺える。そして、大田南畝の「金曾木」（文化六年成）に「予が稚き比、半紙の価十二文なり紙のあきはそれより十四文、十六文、二十文にいたる。（中略）これは明和五年戊子より、南鐘四文銭といふもの出来て、銭の相場賤く、物価貴くなれる故也。」の記事がみえる。

ちなみに、天明七年当時の草双紙の価は一冊八文、三冊もので



「強勢に負けて唯の廿四文安いもんだ」(天明七年刊「現金青本之通」芝全交跋)であった。

注

1 「落語はいかにして形成されたか」(一九八六年二月平凡社刊) 四五頁「時代のカタルシス」。

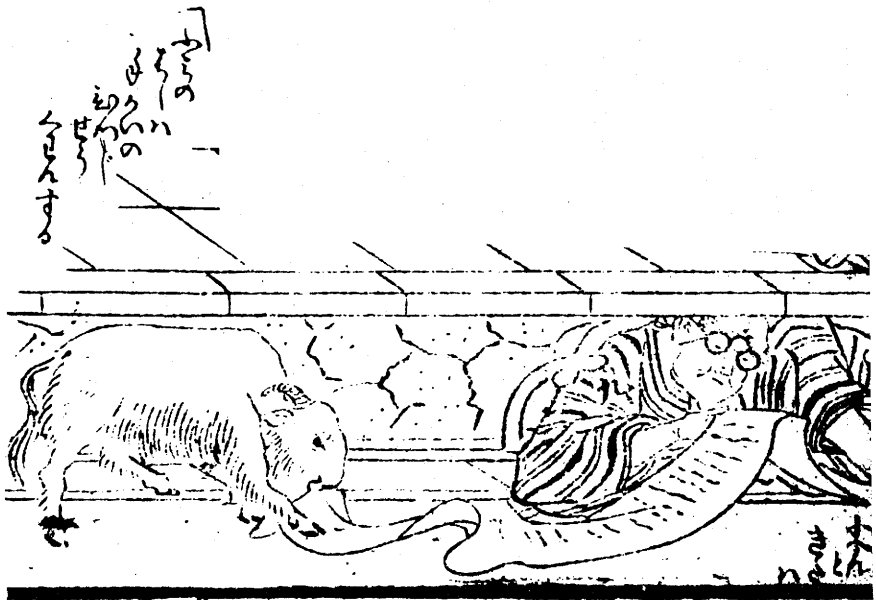


図3 手紙を賞玩するヒツジ(「中華手本唐人蔵」より)